

季誌 能古博物館だより



亀陽文庫・能古博物館の「現代郷土美術館」2階から館玄関および館園の一部、これに博多湾をへだて対岸の福岡ドーム・福岡タワーから筑紫平野を望む。

「亀井家五代を語る」(一)

(付・福岡城下西屋敷絵図)

庄野寿人

南冥の父は聴因。後に千秋翁を号した。

聴因は、当時の怡土郡三雲村(現前原市)に宝永元(一七〇四)年、出生。父は教圓を本名にし、東屋の屋号と通称を新八と称し、農商を兼業して村内で注目される存在であった。妻は大原氏で子女四男二女、聴因はその末子である。

聴因は不幸にも幼少に両親を失ったが、亀井某によって聴因に分与された家政と資産についてよく守ってくれたので、聴因は己が長ずるに及んで、その功勞に酬い、亀井姓を記念に我が家姓とすることを心に期したという。

聴因は農家であり、当時は姓を許されなかったので将来の望みにしたのである。

聴因は十六歳で福岡藩医筆頭の名家、鷹取家に奉公して同家の古医方と徂徠学を学んだ。

古医方と呼ぶと古く感じるが、漢唐の時代から伝世する科学的な医学で、反対に新医方と称する宋代の医派に迷信と気学などが多分に作用し

ていたのである。

聴因二十三歳、師鷹取家での奉公と医診見習いの効果は大きく我が身に修めた。

かねて期していたので、父祖代々、己れの出生地を離れて唐津街道の要地とされ宿場町を兼ねる「姪浜」に移って診療を開始した。同地は、遠く南北朝争乱の時代。九州を宰配する探題北条氏が拠点とした歴史があり、地理的に博多湾の中心部に当る。福岡藩内では福岡城下に次ぐ都邑性を持ち、加えて江戸時代を通じて全国廻船の基地、また地域の農漁業を索引する土地柄で、当然に経済と教養に富む階層も多かった。

聴因の人柄は、気性磊落、人士と益友を求め、俠愛の志気を持った。よって貧者に粟餌を惜しまず密かに金銭、米穀を与えていた。

こうして聴因の生活も安定し、初めて一戸を取得、次いで結婚して一家を構えた。妻は、今川浄満寺「井浦氏」娘の徳である。

徳女は文事を得意とし、また暇あれば紡織に励み、書を読み和歌を作

り、とくに書字を能くした。

聴因は妻の教養に感得して、妻に就いて熱心に習った。己れは三十年ただ生きただけであつたと率直に反省するのであつた。

こうして聴因の学も益々博く、医業も大に行われるに至つた。

これに、藩内著名の医家鷹取養巴先生の直伝という評判も加わつて、以後同地に三十八年は、交遊と支援者も広がつた。また診療も大いに人氣を得た。

時に、岡県の僧宗朗（著拙とも言う）が京都より還つて、詩を福岡に興す志を聞き、進んで我が家に迎えて塾舎とし、また我が二子（南冥・曇栄）を学ばした。折りも良く大坂の僧特芳が訪ね来たり、徂徠先生の生前畏友として知られる僧大潮（肥前蓮池の竜津寺住職）が塾生多数を教えていると聞いた。

すぐに聴因は「これ物公（徂徠のこと）なお健在なり」と、驚喜して直ちに南冥を伴つて大潮入門を果たした。

特に宝暦六（一七五六）年、大潮八十歳、南冥十四歳で以後十八歳まで四年間師事。

大潮は九十三歳で死去、その直前まで学生を教えた。

なお、徂徠没（享保十三年五月・六十三歳）して二十八年である。

聴因の古医方は、診断と薬効で治療効果を実証されると、すぐに評判を呼んだ。

明和元年、聴因六十一歳、長子南冥廿二歳、出生地を離れ、次いで三十八年居住した姪浜を去つて家族共々福岡城下唐人町に六百坪の土地を求め、屋敷構えの堂々とした家作を建て再移転した。福岡城下進出は聴因年来の夢であつたと思われる。

同地は黒門川を挟んだ荒戸町が藩士の馬廻組級の中堅士族の屋敷が整然と揃つて街区を成すのに、同様に大圓寺町、柝木屋町、唐人町北側まで同じく百〜三百石級の士族が屋敷門を形成、この中に聴因の屋敷は唐人町の北側通り角地に位置した。これに南冥を加えて父子共々医療を開業する。

同屋敷は南冥の藩仕官後もつづき、また昭陽代に至つた。

この亀井三代が居住した同地は、明和元（一七六四）年から寛政十（一七九八）年の福岡大火まで三十四年間、文字通り亀井父子三代が世に出た同家の歴史となる土地であつた。いま、同地の有志による「亀井南冥誕生碑」が建てられている。

そのため亀井三代におよぶ、収集

の漢籍類はもとより、著述稿本、資料文書、とくに全国著名の儒者文人からの書簡に至るまで一切が焼失した。火の廻りが早く、火勢も劇しく亀井一家も内弟子まで着衣だけで逃れ得たという。後に昭陽は、自家累代の書物と古文書類だけは取り返し得ないと弟子たちに痛嘆をもらした。

現在は一帯が「唐人町商店街」として町並みを形成、昔の情景を一転して現代的な賑わいを見せている。さらに南冥は診療の余暇に、儒学

（徂徠学）の教授を始めたとされるが、南冥の徂徠学は、先ず大潮に就き、さらに医学を学んだ大坂の永富独嘯庵からも学んでいる。

独嘯庵は、長州下ノ関の出身であるが、萩生徂徠の高弟として名声の高い長州藩儒の山県周南に就いて将来を嘱望された人材で若くして君子を評されていた。

いま師独嘯庵も南冥に深く期するところがあり、良き師弟の信頼を持つた。

独嘯庵は、己れが難治、重篤の患者を求めて、これに診療、薬治の治療を施して広く各地を廻つた医療記録を『漫遊雜記』として出版するに際して、弟子南冥に、その序文を求

めた。

これに南冥は、己れの未熟、かつ師の書物に弟子が序文をするなど大いに不可として固辞したのに、独嘯庵は「汝の修行、すでに卓抜なり。臆するなかれ」として、南冥の序文を以て公刊した。

同書は、独嘯庵の優れた医診の名著として大いに医家に迎えられたのであるが、南冥の序文も併せて、医学卓見の論文として幸いに好評されて再々版を重ねた。未だ無名の南冥であつたが、師独嘯庵の愛弟子南冥に対する深い慈愛を見ることができ

る。独嘯庵は開業しながら子弟教育まで考えていなかったが、その人柄とすぐれた医師を知る者は、敢えて奉公働きをして師の言動を見習いたいとするものが出て、ついに少数の入門者を得ることにした。これで、

すぐに十人をこえる弟子が集まつた。いづれも素質のすぐれた若者ばかりである。其の中でとくに独嘯庵が将来を見込んだ人材三名は、小石玄俊、小田亨叔、これに亀井南冥で、世人はこれを永富門の三傑と呼んだ。

独嘯庵は四年後、惜しくも前途を大いに期待されながら死去する。よつて三傑について付言しておく、小

石玄俊は、後に蘭医学を兼修、蘭法兼医として全国に著名の存在になるが、これは師の独嘯庵が蘭方を志ながら早い死去に果たし得なかつたのを継いだのである。

小田亨叔は、独嘯庵の表弟であり、兄生前の意を体し郷里の長府藩医として仕官した。

次は南冥であるが、南冥の独嘯庵門下時代は、師独嘯庵の一言をも聞き漏らさぬ修行に徹し、師の独嘯庵もよくこれにこたえた。

当時の南冥は、父聴因による学資の仕送りに充分で、余裕あれば書物を求めよ、とされていたが、身装にかまわず頭髪は背後に束ねるだけ。

これで永富門における南冥の勉強ぶりはすさまじいもので、学友の元俊が「南冥は実に猛虎のようなものであった」と、語った。これを後に日田の広瀬淡窓が聞き書きしており、この一言が、京坂での南冥修行をよく語りつくしていると思われる。

また当時の医学は一般によく知られる中国の『傷寒論』が医学原書の一つであり、したがって医師の勉強に漢学と儒教の教養を必須とした。

33号 南冥は、先師の大潮、医師の独嘯庵に一貫して古文辞学を学んでいる。この古文辞学は、萩生徂徠がとくに

その学説を展開したので徂徠学派、また古文辞学派と呼ばれた。

その主張は、儒教の原典を正しく読んでその真理を解するには、漢唐の古義、古文辞に回帰しなければならぬ。当世の朱子学は中国後世の宋代に興ったもので、原理を離れて学者の誤った援用解釈が多く、これを就学者が固守することから学問の混乱を招いているとした。

また、幕府側も体制維持のために改革論が盛んになることを恐れて朱子学を幕府教学（昌平黌）を守るものとして、徂徠学、陽明学など排斥を意図して「寛政異学の禁」と評される措置を昌平黌に指示し、これに朱子学派の温存を図ったのである。

いま一つ「朱子学は神君（徳川家康のこと）お定めの学なり」として家康以来の因習を固守した。これは幕府の草創期、家康が林羅山の朱子学講説を聴き、他の学派を知る機会もなかったことに起因する。

徳川も後期になると朱子学の観念性は諸藩に於ても徂徠学等の実学派に押され、神君説は全く通用せず、幕府の支えにならない状況になっていた。

それでも諸藩における先例固守は容易に改まる気配はなかった。とく

に福岡藩に於ては、先君黒田長政以来五代継高まで一子相伝、血脉相統が続いており、これは時代的に慶長五（一六〇〇）年から六代継高の安永四（一七七五）年死去まで実に一七五年間、この間すべて先例固守から新規例外を踏むことはなかった。

藩の儒学指導は、長政以来の朱子学竹田氏が藩儒家として諸般宰配による以外はなく、例え藩内に亀井南冥の学派が台頭しても、朱子学竹田家はこれを無視したのである。

先君継高の没後四年、新藩主に迎えられた一ツ橋家の治之公就任から九年後に、家老久野外記の推挽によつて安永七年五月、町医亀井南冥が十五人扶持で十分に登用され、儒医を以て藩主治之に仕える、となった。

この時、南冥登用の最初は儒者であったが、藩儒を家業とする竹田家から苦情があり、儒医に替えられたいきさつもある。後に至つて判明するが、藩儒竹田家は、代々知行三百石、藩儒として唯一独占の家業を専守しようとする策動であった。

事実、竹田家は既に四代、この間に世襲三百石として名目だけの儒業職筆頭におさまり、教授など実務は被支配の多数儒者に任せ、竹田家当主には教授に当る学務能力はなかつ

たとされる。新年の藩主学問初めには、竹田氏が形式的に「論語〇〇篇を進講する」と披露するだけで、その講義は門下の弟子が当り、年々これが形式となって実行されていた。

これこそ先例規格として、藩主はもとより異議する者もなく繰返される行事であった。竹田氏は藩儒として、その職務筆頭者におさまり、これが同家の家業として定着したのである。

家業職とする儒者は、竹田氏を筆頭に十二名。この中で藩主に進講は次席の島村、榎田、井上、真藤、福井の六家と、これに次ぐ六家で計十二家があった。

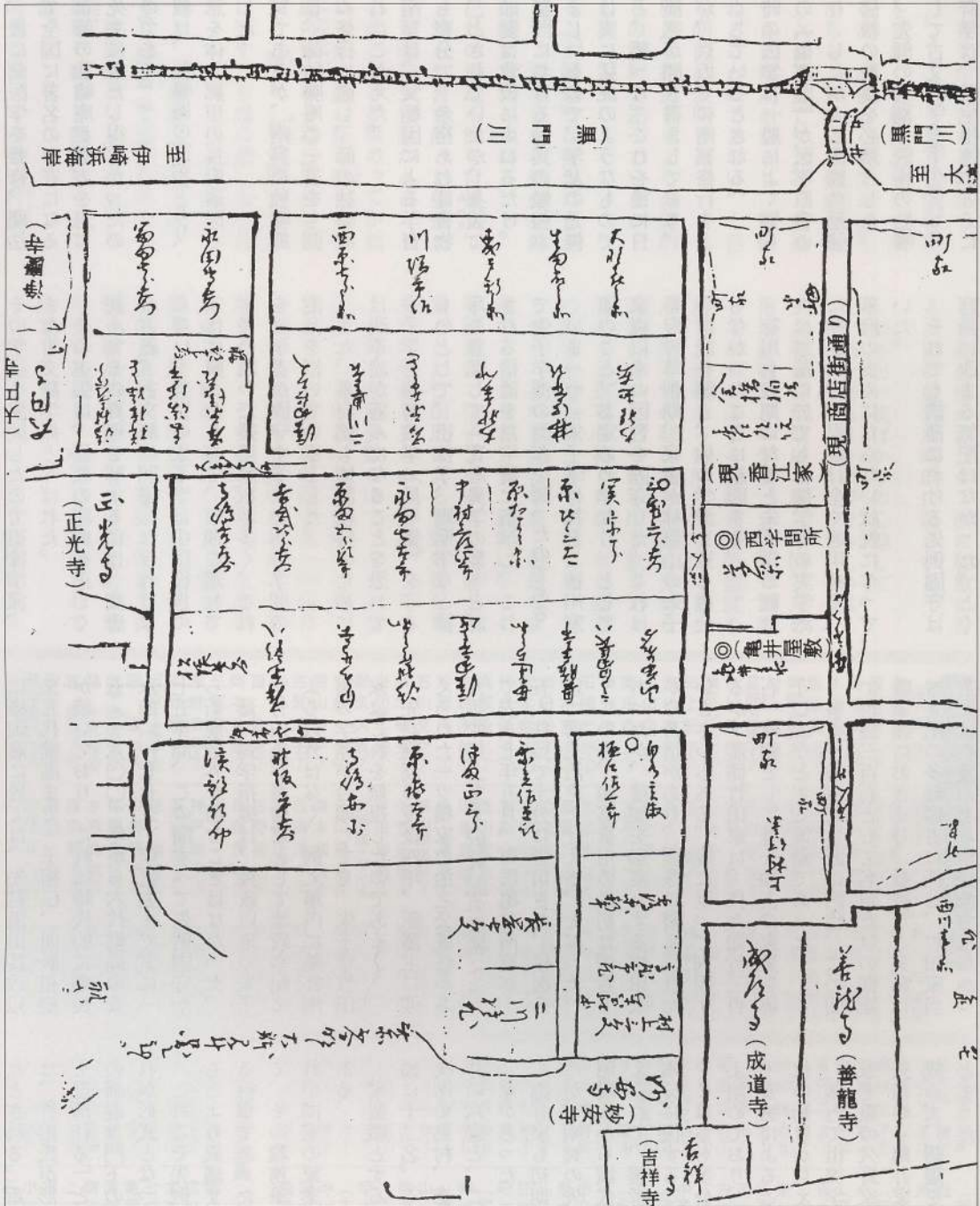
亀井家も初期は儒者職に就いていたが、南冥の失策で儒職を外され、昭陽代から城代組士として平士に替えられて、儒者職を除かれ、ついに本分に復することはなかった。

これらも多分に朱子学の退潮が見え始めており、竹田氏の自己保身と不安感によるとされるが、すでに時代の動きが見え始めているのである。

藩内で徂徠学を解する有力者は、家老職の久野家であったが、南冥の失策から亀井家の儒者復職はついに成らず、昭陽を十分にとどめるにとどまった。

(参考付図) 福岡城下「唐人町、亀井屋敷、西学問所」絵図

(原図 福岡県文化会館収蔵)



(註) 本図の作製は、右上に亀井主水と学問所の記載から、天明4(1748)年以後で寛政10(1798)年の大火による学問所焼失までの期間が想定される。図中の寺院は現在も同位置に残り、氏名記事によっても同位置で当主子孫の現住が数軒確認される。よって以上の推定は確実に証することができる。

アコウを植える

安 陪 光 正

能 古 島

アコウ(ウスク)は山榕とも赤榕ともいう。ガジュマル(榕樹)の兄弟木で、ともに榕の字を使う。これは枝の気根が垂れ下がって地に着き、根を生じ、それがまた幹となって繁茂する。その樹下に多数の人を容れて涼を与え、憩わせることができるような大樹となるため、木が人を容れるすなわち榕の字を当てた。昔インドのマドラスに行ったとき、郊外にバンヤンという大樹があって何百本の支根を垂れ、一本の木が森を作り、緑陰に五千人を容れるという話を聞いたことがある。これはベシガルボダイジュでアコウとは異なるが、次々に支根を垂れて樹冠を広げる点ではよく似ている。

(5) 第 33 号

能 古 博 物 館 だ よ り

アコウは九州では天草に多い。南の島から対馬暖流に乗って運ばれるアコウの実が、流れついてこの海岸に育つのである。私をはじめこの木を仰いだのは、昭和三十三年の秋、六か月の長男を抱いて天草の妹一家を尋ねたときである。本渡から

島原へ渡る帰途、島原湾の南に浮かぶ湯島に立ち寄ったが、島のアコウは港に群落を作るのみでなく、その上の民家の間に林立していた。黒々



春日神社の天然記念物あこうの老大樹

と茂る大樹の下に、家が所を借りているようだった。島人の話では、皆がこれを誕生木とするため、大樹となって家々を覆うのだという。天草は、遠き南の島より、アコウの実をのせた暖流に洗われる島である。天草や島原半島の海浜を旅すると、浜辺に茂る一、二本のアコウの木をよく見かける。口之津町早崎港

の群落は、今までに見たものの内一番見事であった。

この木は実生でも、挿木でも育つ。湯島からもらってきた苗木を、鉢植えにして大事に育てた。雪霜を知らぬ南の国の木だから、冬は室内に入れた。年々太くなるので鉢を太め、枝を切った。切った枝から、白い乳のような樹液をしたたらせるので痛々しかった。あまり太くなるので自宅から病院の中庭へ移したが、遂に鉢を持ちきれなくなっ

た。寒に負けて枯れるかと案じていたが、春になると新芽をふいた。気がつくくと、鉢の底穴から出た根が四方に広がって、動かすことができなくなっていた。思いついたのが能古博物館への移植である。能古は雪霜を知らぬ母なる湯島に似た暖かい島博物館は島の南斜面にある、ここから千年の寿をえられるだろうと庄野理事長にお願いしてお許しを得た。

地 籟

老子講義の二月と三月に、一本ずつ川上君に運んでもらった。枝を切りつめ、鉢から四方に伸びた太根を切り、鉢中の根も切って身軽にする

と、ようやく持てるようになった。この二本は共に根元から三、四本に枝分かれしていた。博物館の講義室下に、十メートル以上離れて二本が植えられている。今の所は胸高の背丈で、一度全部落葉し、また赤い新芽を出した。アコウは不思議な木で、年に二、三回不時に落葉し赤い新芽を出す。

天草のアコウで一番立派だったのは、御所浦島春日神社の巨木である。これには「天然記念物あこうの木」と彫った石柱を立てる。根元から七本に枝分かれし、蒼苔に覆われた太幹を広げる。三百年を経たというだ

能古博物館だより

けあった、幹の処々に空洞があり、時々小鳥が入り込んでいた。風雨に絶えて生きてきた大樹は、あたかも巨竜のたうつ如き枝振りで、青葉は天蓋のごとく小社の屋根を覆っていた。この樹を思うと、金谷 治著『莊子』齊物論篇の大樹の形容に似ていた。

「百開えもある大木の穴は、鼻の孔のような、口のような、耳の穴のような、細長い酒壺の口のような、杯のような、臼のような、深い池のような、狭い窪地のような、さまざまな形である（が、さて風が吹きわたると、それが鳴りひびく）。吼えたりするもの、高々と叫ぶもの、低く叱りつけるもの、細々と吸いこむもの、叫ぶもの、号泣するもの、深々とこもったもの、悲しげなもの。前のものが『ううっ』とうなると、後のものは『ごおっ』と声をたてる。微風のときは軽やかな調和、強風のときは壮大な調和。そして風が止むと、もろもろの穴はみなひっそりと静まりかえる」

と風に鳴るにちがいない。

天 籟

講義は今日から『莊子』齊物論に入った。金谷 治先生のテキストによると、師の南郭子綦が質問した子遊に言うには、

「お前は人の吹く籟（人籟）は聞いていても、ま

だ地の籟（地籟）を聞いたことはなく、お前は地の籟を聞いたとしても、まだ天の籟を聞いたことはないであろう」と

『字統』によると籟

をふえ、ひびきと書いている。なお「三孔のふえなり。大なるものは笙、中なるものを籟、小なるものを箛と

いう」とある。これらの笛の音が人籟であるから、これを聞かない人はいないであろう。今では籟の字を使うのは、松籟ぐらいで、松に吹くゴウゴウたる風の音と茶がまの湯のたぎる

音に使うぐらいである。

我々が深山に入って夜の静寂に對するとき、地底から響いてくるような重厚な山鳴りを聞くことがある。それは風に鳴る全山の木々の籟（地籟）である。先年私は対州内山において、この山鳴りを聞いたことがある。



移植したばかりの能古博物館のアコウの木

る。内山は四囲を深山幽谷に囲まれ、

た小盆地、ホトトギスを聞きに行った折この地籟を聴いた。ホトトギスのよく鳴く夏の夜、分教場の

教員宿舍でのことであつた。さらに、テキストは、「地の籟も人の籟も、そもそも吹きかたはさまざまで同じでないが、それらはすべて穴や竹管みなそれぞれに自分で音を出しているのだ。すべてそれ自身で音が選ばれている。音を出させる者はいったい何物であ

らう。そんな者はありはしない」みたいう。「天籟は、人籟地籟の外に別にあるのではなく、それら現象の万籟の中に鳴りひびいているのであり、それに耳を澄ます境地が坐忘の世界である」と

鵬の如く

先生の講義を聞きながら人籟と地籟とはよくわかったが、人籟や地籟の中に天籟が鳴り響いているというのがわからなかった。人籟地籟を響かせる者は、そんな者はないといっているようである。私は今までに講義を受けた『老子』の道・無・自然・谷神などを思い描いた。『莊子』は『老子』に比べると例もあってまだわかり易いというが、この齊物論は何度読んでも難解であつた。人籟や地籟の音を出させる者は誰ぞやと、つき離して何の説明もない。言葉では言いえないのであろう。

相対的分別の世界を飛びたつて、鵬の如く天空を飛翔して絶対的境界に立たなければ、これを解しえないのであろう。「聞けども聞こえず」のたぐいで、耳で聞こうとするから聞こえないのであろう。百年後この窓下のアコウが大樹となり、人々に天籟を教えてくれるかも知れない。

貝原益軒について

一、先祖のこと

その詳細はわからないが、代々備中国（いまの岡山県）「吉備津宮」の神職をつとめていた。室町時代末の多兵衛（益軒の曾祖父）代に岡山に移住、九十歳で没した。その子の市兵衛（後に久兵衛、晩年宗喜と号す）は、甲州の武田信玄に仕えたが、その子勝頼の代に辞し、播州に至って黒田如水に旧縁もあって仕えた。

能古博物館だより

折柄、豊臣秀吉は九州征伐を考えており、まず黒田如水をして九州各地に与党工作をさせていたが、この中で市兵衛の動きが目立つものがあり大いに如水の手柄になった。

秀吉は、九州平定後、黒田氏を豊前中津の城主とする。

秀吉の朝鮮出兵にも黒田氏は先鋒になるが、市兵衛はよく黒田家の船舶輸送を采配した。この功賞として市兵衛は、慶長二（五）三年、豊前上毛郡鈴熊村で百五十石の知行所を得た。当時、市兵衛は五十歳をこえていたが、さらに慶長五年黒田家が関が原役による東軍徳川氏のために抜群の功績によって主家黒田家の筑前

国拝領に主家および家臣団の大移動を短期間に完結させ、次いで、福岡舞鶴城の造築資材の調達を担当、これら数々の功績によって抜擢を内命されたが、己れの中風症による歩行不自由を理由に辞退し、宗像郡勝浦を知行地とする百五十石に甘んじた。

寛永三（六）六年、祖父市兵衛はよく戦国武士、また藩制成立期の能吏として活躍し、七十七歳で没した。

家督は、長男四郎太夫利貞（後に寛斎を号す。これが益軒祖父である）

二、父と兄

関が原合戦に、黒田家は東軍徳川方として戦後功賞で大國筑前五十二万石を得た。益軒父の四郎太夫は慶長二（五）五年生れ、よって筑前入国は四歳である。父の結婚は十八歳、母の旧姓は三毛門で、名は「ちく」、父との間に五男子をあげ、益軒は末子、父は三十四歳であった。

益軒は、寛政七（一三）年十一月十四日、福岡城内東邸に出生する。

（註）福岡城は表濠の西側登城口を大手門（通称下の橋という）、東側登城口を上上の橋と呼び、城内東側は主に高級家臣団の邸が並び、この間に祐筆役（家老職の秘書を兼ねる）など城内居住士の住居も配置された。

よって益軒の屋敷は、この城内東側に在った。

益軒の兄四人、長子の太郎助は早

世。よって次の家時が長兄となり、次兄は元瑞（号は存斎）、三兄は義質（号は楽軒）。

生母「ちく」は益軒六歳に病没。

益軒は、七歳で假名を自得し、草子類を好んで読む。九歳の時、父と長兄の家時が島原の役に従軍。この留守に次兄の存斎から漢字を学ぶ。後、次兄は藩命により京都に医学修行に出る。

益軒父は、祖父の進取性に似ず、謙虚で家族、召使にも教え諭す式で当時の武士がなお戦国の余風に銜うのに馴染まず、医学の心得があり、浪人した時期には医薬を売って生計をたてた。そのためか、二男存斎、三男楽軒、また益軒も武よりも書を好み学を志したのは多分に父の影響と思われるものがある。

三、益軒の初出仕―謁見停止―再出仕―追放と浪人七年。

益軒は、十九歳の慶安元（一六六〇）年十月、藩主忠之の衣服調度を受持つ小姓役として出仕を命ぜられ、四人扶持（一日米五合であるから二升、月三十日で六斗（90kg）支給）部屋住み子弟の給付である。

同年、忠之公の江戸参勤に従い、父と共に江戸行きを果たした。翌年、帰国して元服（二十歳）する。当時

としては随分遅い元服である。この頃は、父親の不遇もあり、経済的に父子共に詰まっていたのであろう。

同年八月、藩主の長崎警固役の巡行に従う。福岡藩は佐賀藩と共同で隔年の長崎湾警固役を幕府に命じられていた。

この帰国後、藩主忠之の不興を受け出仕を止められる。理由は益軒によくわからないが、動き方など忠之に不愉快を与えたのであろう。

十一月、再出仕を認められ、遠賀郡底井野の藩主別荘の守衛に就く。

翌三年後、再び忠之の怒りにふれ、出仕を停止。時に益軒二十二歳、以後七年間浪人する。

益軒は十四歳で次兄存斎の勧告により仏教を生涯不信とするが、自分も学問充実と共に兄の真意を理解していた。これに主君忠之は、異常に密教信仰があり、生前すでに自分の墓所を父祖代々の臨濟宗大徳寺派（福岡崇福寺を黒田家菩提寺とする）を離れ、真言密教による加持祈祷を重んじる信仰に移っていた。

このため、益軒の仏教不信を知られて勘気を招き追放されたことも推察されるのである。

益軒の排仏主義は、儒学執心によるものであるが、これに徳川時代の

益軒の排仏主義は、儒学執心によるものであるが、これに徳川時代の

能古博物館だより

寺院僧侶のあり方が、幕府のキリシタン禁制によって仏僧の独善と墮落を生じ、仏教本来の衆生済度(しゆじゆど)を忘却したあり方に不信を持ち、併せて儒学の科学性思考によるせいもある。

四、藩主交替・再任官と京都遊学
益軒は父の江戸出仕に伴われ再三の江戸生活を体験した。

明暦二(一六五五)年の廿七歳。十月、益軒の浪人中である。父に同伴して出府。この途中、伊勢参宮した。

江戸では、父が以前から三代藩主光之に益軒再出仕の内願が認められた。益軒は六人扶持を給され、立花勘左得門重種の組入りとなる。これは益軒に重大な好機をもたらすもので、藩主光之に立花氏の好学が益軒の生涯に長く及ぶのである。

益軒は翌年四月、京都遊学を命じられる。直ちに上京。山崎闇齋に就き、又、木下順庵にも入門する。

時に益軒二十九歳。西洞院に居を定めて自宅講義を開始。この講学は己れの勉強充実になると考えた。

二月・大学講義。三月・論語を講義。

万治三(一六六〇)年(京都遊学二年目)
この年、藩主光之が参勤のため伏見通過に当り、かねて連絡があつて召見され、学問出精を賞され、時服

および書籍料を下賜され、なお加増十石を受ける。

翌寛文二(一六六二)年十一月には、江戸藩邸に呼ばれ、四ヶ月滞在。江戸詰め家臣団に講義を授業。四月江戸出発、京都に帰る。時に、藩命による国元から上洛する宮崎安貞に同人が稿成する『農業全書』に協力。兼ねて伊勢路に向い、先進農業地の実地を見学、再び京都に於て農業実地を檢分して安貞に協力する。

益軒京都自宅の講義再開。『大学章句』・『論語集註』など、日に一回講ず。

十一月、安貞再入京。三井寺に遊び安貞は帰国。寛文二(一六六二)年五月朔日、益軒に帰国を命ぜられる(京都留学六年に及んでいる)。帰国後、加増十石(計三十石)。

女原村の宮崎安貞を訪う。

九月朔日、主君光之の参府に從行を命ぜられる。瀬戸内の船中にて藩主公に進講。

時代は、我国の余風去つて幕藩下の文事氣運に進行が見え始める。

京都に滞留し、十一月一日から益軒旧居に於て講義再開。『中庸』・『孟子』を日に二回。聴講生多し。

寛文三(一六六三)年、藩命により京都に於て公家衆との交際を始める。

京都・福岡藩邸の前屋に転居。寛文四年三月帰藩を命ぜられる。鳥飼に屋敷を与えられ、本知行百五十石を受け、中間、小者を格式通り常置する。

九月、藩主光之の参勤に從行。この時から、益軒初めて格式の槍持ちと中間を從える。

江戸藩邸に於て、益軒、幼君万千代(後の藩主綱政)に『小学』を講じ始める。時に三十五歳。

同五(一六六五)年二月、江戸藩邸にて『大極図説』を講義。三月、藩医西原元良と幕府の上野薬園を見学。

三月十四日、京都遊学再開。当時の主な交友は中村惕斎、米川操軒、伏見典宣幸など。

十二月三日、父寛齋、中風によって国元に没す。この年『易学提要』・『讀書順序』を著述。同六(一六六六)年一月、父の喪服に帰国。

夏、発病。神経衰弱症も出る。

十月、藩主光之の参府に先行。入京、次いで出府。年末、江戸に於て発病。

こうした益軒の発病は、父の死によって、うっ積していた過労によることも多分である。

京都留學は、学問好きの藩主によって手当も十分過ぎるものがあり、本

人自身の経済も、福岡に於ける馬廻り身分に相当する屋敷を与えられ、これに身分相應の使用人と自身の役職と生活を含め知行百五十石は、自身の益軒に過分の余裕が生じるものであった。好学の立花一族が文治主義政治の確立によって藩主の意を迎えるためにも益軒の学識を有効とした。このため益軒の待遇は立花氏による配慮も少なくなつたとされる。しかし、これらが益軒の志操と學術をまげることがなかつたのは、さすがといわなくてはならない。

五、益軒遊里通い、性病に失態。
三十九歳で結婚

益軒は自らも向学心が強く、努力も相当なものがある。しかし、京都における学業と生活に、ヒマと金もある。このため益軒の島原通いは相당한ものがあつた。

通い詰めたあげくは、「相愛の仲」となった遊女もでき、また予防法が普及していない時代のため性病にも感染している。現代の完治薬方がなく、益軒の苦悩は「淋を病む」が最大の難症となる。疝氣症にもなつて痛みにたえかねて病臥をくりかえす始末である。

益軒三十九歳、秋月藩江崎氏の娘十七歳(後の東軒夫人)と結婚。生

涯なかつまじい夫婦で知られるが、武家に最も重大な後嗣に恵まれなかった。益軒の慢性疾患は、すでに子宝の根元を断ち（淋病の睾丸炎による）、また新婦に感染して出産不能としたとも考えられる。

妻の同意もあって、後継を得るため健康な農家の子女と同床一年を三人までくりかえすが効果がなかった。ついに益軒も断念するに至る。さすがの益軒にも、その原因が自分の性病による自覚がなかったのは、現代医学との相違である。

益軒に『養生訓』あり、有名であるので、以下少しく紹介しておく。『養生訓』・総論について飲食・飲茶・煙草・慎色欲・五官・二便・洗浴・慎病・扱医・用薬・養老・育幼・鍼灸法を項目とし、事実にも則した考えを基として具体的に詳述される。しかし、その記述は道学的な扮装を多分にし、精神療法と自然療法とによる養生の道を示している。

『養生訓』を最も有名にしたのは「慎色欲」（色欲をつつしむ）の項である。たとえば年齢による性交の回数を示すのであるが、これは中国の『千金方』・『素女経』等をそのまま引用しており、現代の科学的認識から、特に必要とする内容はない。

益軒は、四十余年つれそつた愛妻東軒夫人を失ってから心身の寂寞が甚だしく、おかれること八ヵ月、正徳四（一七二四）年八月二十七日、嗣子重春、親戚・門人に見守られて八十五歳の生涯を静かに終えた。

益軒の遺骸は菩提寺の金龍寺に葬られたが、住職と寺僧はかねて益軒の排仏論と読経の無意味を知っており、ただ益軒の柩に拝礼するのみで経文一切を口にできなかった、と伝えられる。

以下、参考に補稿する。

自らは、わが身を弱くつかれやすい性質として養生を専一しながら、慶安元（一六八六）年冬、父に従い初の江戸入府し翌三月帰国。その後、藩主の参動に供奉十一回、留学と己れの研学として京都へ二十四回、長崎五回の旅行をするが、派手、ぜいたくをせず藩からの旅費で一度も追加金なしで済ましている。しかもその往復旅程の中で名所・史跡など必ず見学して、己れの紀行記録にした。自然美の享受、史跡と歴史の検証など多数自著の内容を、平明で情緒豊かに地方の産業・地理を伝えている。益軒の著述は、漢文をとらず民生日用の学を唱え和文を特徴とする。益軒の学問は、朱子学から入った

が進むにつれ、次第に朱子学に対する疑問を持つに至った。これを述べて批判すると異学を唱えるような誤解を生じるので、用心して沈黙を守っていた。しかし益軒の思考は、高弟の竹田春庵には示していた。

また晩年によって『慎思録』六巻を大成。これによって古人の説に盲従せず慎思明弁せよと説き、道徳・哲学・教育に至る自己の見解を自由に述べた。以後、さらに『自娛集』および『大疑録』によって益軒が晩年に到達した思想・学説を発表している。益軒に先んじて、すでに早くから芽生えていた朱子学批判は、京都の伊藤仁斎が著明であるが、朱子学者には「神君（家康のこと）お定めの学問なり」として体制的に朱子学を固守し、他派を制圧している。

益軒は、朱子学に対し、ある箇所に異論を持つにすぎず、これで異学を称せられるに当たらないと自己弁明と、門下の竹田派を守ったのであるが、これがひいては朱子学全体を否定する第一歩になる。

益軒死去は、正徳四（一七二四）年夏であるが、同年正月から益軒は健康を害し来客を断りながらも、春に『慎思録』、夏は『大疑録』に最後の校訂を加え、前文に述べた臨終を迎え

たのである。

刊本『大疑録』二巻は、益軒死後五十年を経て、明和四（一七六七）年、江戸の須原屋市兵衛が出版する。

著者は筑前貝原篤信・仙台大野通明校とされる。大野通明は北海と号し仙台出身の兵学者で萩生徂徠に学び、後に兵学を子弟に教授した。

また、益軒高弟の竹田春庵は、古文辞を萩生徂徠に指導を受け、徂徠も彼に好感をもって遇しており、竹田家には徂徠の書翰数通がある。うち享保二年に、春庵の求めに応じて徂徠が詩の添削をなし、また続いて『大疑録』の事始めて之を承わり候、扱も千里之外、先に吾が心を得る者あり。（中略）ちかちか近日御承わり合わせ一時熟話仕り度く存じ候。心事、筆札に尽し難く候」と。同志を得たものとして欣んで返酬している。時に益軒没後四年、春庵の江戸入府中とする。

また、太宰春台（徂徠高弟）は、益軒の『大疑録』を「始めて知る。益軒先生の程朱之道を信ずること斯くの如くそれ篤く、而して之を疑うこと斯くの如くそれ大なるを」（原漢文）と表現しながら、その「弁論は宋儒範圍の中にあり」と、遺憾を表している。

能古博物館だより

益軒は、朱子学批判の立場から、『大疑録』によって、まず孔孟に始まる儒学を受継ぐ正統派として、宋学の意義を高く評価し、程朱の功を重視しながらも、宋学には偏癖蔽固(へんへきへいこ) (かたよって、なおかたくな)、高遠で分析にすぎない傾向ありとし、尊信するが阿ねることはできない、と自己の立場を明白に表明した。

ついで疑点を指摘し、より合理的とする自らの解釈を述べているが、これは省く。

ともかく『大疑録』は後世にもかなり読まれて、思索自由の傾向を助長するのに役立ったとされる。

益軒が己れの再起不能を自覚して自ら親戚・知人に書き配った感懐には次のような漢詩や和歌がある。

平生の心曲(こころ)のまき誰あつてか知らん、常に天威を恐れ斯く勿(な)らんと欲す。存順没寧(ぞんじゆんぼつねい) (生存して環境に従い、死して安んず) 克(か)わらずと雖も、朝に聞くを得ば、夕べに死すとも豈に悲しきと為さん。

(原漢文・以下同)

また、幼より斯道(しど) (聖人の道) を求めて孤懐(こくわい) あり、徳業成るなく宿志(しゆくし) に乖(そむ)く。八十五年底事(なご)ぞ成る、讀書(とく)り楽しむ是れ生涯(しやうが)。

ともに儒学者としての強い矜持(きんぢ)の

上に悲壯感が漂うが、次に和歌になると死の悲哀が端的に語られる。

越(こ)方(かた)は一(いち)夜(や)ばかりの心地(こころ)して

八十路(はちじゅう)あまりの夢(ゆめ)をみしか

益軒は青年期に本草(中国古来の薬用植物などの学問)・医学を習得しながら、朱子・陽明兼学の態度を保持した経歴から当然に気を重んじたが、朱子学の理と気を殊更に分ける論議について、その不用を説き氣一元とする思考を持ったが、なお識者の教示を得たいとしていた。

また、益軒には古学派、徂徠学に通ずるものも多分、益軒につづく福岡藩内で朱子学を奉じて藩儒を家業とした竹田氏による学問姿勢には大いに相違するものがある。

益軒の著書多数の中で、とくに有名にされるのは『養生訓』(八巻)である。本書は益軒没する一年前の八十四歳に及んで大成されたことを思うとき、その存在は尊い。本書の構成は、総論二巻について、飲食・飲茶・煙草・慎色欲・五官・二便・洗浴・慎病・択医・用薬・養老・育幼・鍼灸法の各項目が事実(じじつ)に則した考えを基にして具体的に詳論されている。

しかしその記述は道学的扮装を多

亀陽文庫・能古博物館友の会

- (福岡市) 五置貞正(7)、西島道子(7)、西嶋洋子(7)、木戸龍一(7)、吉原湖水(7)、岡部六弥太(7)、村上靖朝(7)、星野万里子(7)、吉村雪江(7)、桑形シズエ(7)、田上紀子(7)、安松勇一(7)、高田浩二(7)、桑野次男(7)、石橋七郎(7)、藤木充子(7)、和田和子(7)、板木継生(7)、行成静子(7)、鬼塚義弘(7)、中畑孝信(7)、片岡洋一(7)、石川文之(7)、橋本敏夫(7)、山内重太郎(7)、都筑久馬(7)、斎藤拓(7)、横山智一(7)、古賀清子(7)、宮崎集(7)、西崎金蔵(7)、岡本金蔵(7)、三宅碧子(7)、星野金子(7)、吉村陽子(7)、天谷千香子(7)、原重則(7)、岩下須美子(7)、林十九楼(7)、宮微男(7)、安永友儀(7)、織田喜代治(7)、上田博(7)
(太宰府市) 鶴田スミ子(6)、塚本美和子(6)、速水忠兵衛(5)、西川真澄(5)、青柳繁樹(5)、磯崎啓子(5)、寺岡秀實(5)、原田種美(5)、石橋清助(5)、長八重子(5)、井上敏枝(5)、隈丸清次(5)、吉富とき代(5)、浜野信一郎(5)、坂重二郎(5)、岩重二郎(5)、桃崎悦子(5)、大神敏子(5)、大山宇一(5)、葉山政志(5)、川島貞雄(5)、岸洋子(5)、柳山美多恵(5)、久芳正隆(5)、半田耕典(5)、武藤瑞二(5)、森山雅敏(5)、森本憲治(5)、吉田洋一(5)、永岡善代太(5)、古野開也(5)、長尾茂穂(5)、平河涉(5)、神戶純子(5)、渡辺美津子(5)、原敬道(5)、山田博子(5)、佐藤泰弘(5)、木原光男(5)、前田静子(5)、飯岡晃(5)、吉岡克江(5)、矢富謙治(5)
(朝倉郡) 鬼丸碧山(7)、黒川邦彦(7)、山崎エツ子(7)、古賀謙二(7)、西尾弘子(7)、平岡浩浩(7)、野尻敬子(7)、蔵田つよ(7)、吉瀬宗雄(7)、結城慎也(7)、大野雅治(7)、大野正昭(7)、古賀邦靖(7)、吉賀三郎(7)、中島栄三郎(7)、青木良之助(7)、松本雄一郎(7)、神崎憲五郎(7)、友野隆(7)、鈴木忠津(7)、酒井俊寿(7)、井手加維子(7)、長崎榮市(7)、上杉和稔(7)、庄野陽一(7)、守瀬孝二(7)、榊島政信(7)、木村秀明(7)、野上哲子(7)、金子柳水(7)、佐野至(7)、井手カヅ(7)、井上清(7)、宮崎春夫(7)、富田英寿(7)
(長崎県) 浦上健(3)、(熊本県) 山口県、(山形県) 大塚博久(6)、(大阪府) 小山敬也(7)、(大牟田市) 前田敬也(5)、(滋賀県) 辻本雅史(5)、(京都府) 松田清一(7)、(愛知県) 杉浦五郎(7)、(神奈川県) 野崎逸郎(7)、中野晶子(7)、大谷英彦(7)、野崎逸郎(7)、住本直之(7)、(東京都) 山根ちす子(7)、村山吉廣(7)、片桐淳二(7)、田中加代(7)、大島節子(7)、住本直(7)、(埼玉県) 間所ひこ(3)、(石川県) 丸橋秀雄(6)、(伊藤英邦(7)、(富山県) 田中信彦(7)
(春日) 南誠次郎(5)、(熊本県) 木原敏吉(6)、(甘木) 具嶋菊乃(5)、(嘉穂) 坂田貞治(5)、(直方) 大久保津智夫(5)、(直方) 庄野直彦(4)

【協賛会会員(個人)】

- (福岡) 梅田光治(5)、大里豊男(4)、七熊澄子(4)、亀井准輔(3)、熊谷雅子(3)、上田満(3)、富安渡(2)、石橋観一(2)
(福岡) 菅桐寛子(7)、菅直夫(7)、早船正登(7)、浄満寺(7)、奥村宏直(7)、永田蘇三(6)、笠井徳三(6)、荒木靖邦(6)、沖双葉(6)、安陪光正(5)
(福岡) 梅田光治(5)、大里豊男(4)、七熊澄子(4)、亀井准輔(3)、熊谷雅子(3)、上田満(3)、富安渡(2)、石橋観一(2)
(春日) 南誠次郎(5)、(熊本県) 木原敏吉(6)、(甘木) 具嶋菊乃(5)、(嘉穂) 坂田貞治(5)、(直方) 庄野直彦(4)

分にするといわれているが、精神修養と自然的療法による長生の道を示したものと解される。よって現代からすると不審と思われることもあるが、往時においては事実にも則した養生書として貴重なものであった。同書に付して著書自ら「古法をひろく知り、その力を以て、いまの時宜にしたがいて変に應ずるべし。」

また、古法にあらざしても、時宜によくかなへば用ふべし。とくりかえし述べる。こうした言葉から当時おこりつつあった古医法的傾向がうかがわれるが、本書をつらぬく思想は、人は天地の「元氣」を受け、この氣をもつて生の源、命の主とするものであり、氣の充足を図って減退を防ぐことが大切であると説く。こうして「氣」を肝要にするのは、すべて養生の道は氣を整えるにあり、毒は氣を塞ぐもの、薬は氣の偏とするものである。元氣は、人身の根本であり、「もとは天地の万物を生ずる氣」から派生したものの、内外相応するものと見なすのである。

当時の医学において、すべてを氣で説いた益軒において、朱子学の理氣三元論に賛し得ないのは当然であった。ここに益軒が氣に則した理を説くにいたったのは、その医学的見地

によったことになる。従って益軒には、古学派の仁斉、徂徠のように理を軽視、または無視することは不可とする。

また、飲食・用薬において、日本人は中国人に比べて体気が薄弱とする持論から、諸獣の肉は日本人に宜しくないとした。

幕末の蘭法医松本良順の『養生法』は、益軒『養生訓』に則しながら西洋医学の立場から説いており、ために西洋風の肉多食をすすめて益軒説に反対した。

益軒は自ら儒医をもって任ずるところとはなかったが、その門下から医師となり、また医学に関心をもつた者は多い。

元禄三年、益軒三十歳の日記には上欄に小字で同居の姪などの月経の始まりと終りを記している。女人の月経は不浄として当時は人の忌むところであり、益軒がなぜ記したかは不明であるが、このころ益軒は月のみちかけと海潮の干満が言われるので、こうした面まで科学的な関心を持ったものとされる。

また、益軒の門人で、なお藩医の鶴原玄益に医を学んだ香月牛山がおり、東軒夫人の重病に際して数回にわたり来診し、益軒とよく話してお

- 【宗 像】 七熊太郎⑦ (東 京) 白水義晴⑦ 原田國雄⑦ (長 崎) 江崎正直⑦ 森光英子④ 浦上 島④ 石野俊隆④ 西喜代松⑥ (北九州市) 早船洋美① 永井 功④ (愛 媛) 翠川文字③ 本村康雄② (唐 津) 小堀定泰③ (千 葉) 中山重夫⑤ (神 戸) 多々羅節子⑥ 緒方益男⑦ (佐 賀) 伊藤 茂③ (静 岡) 武内隆恭② (佐世保) 熊谷豪三②

【法人協賛会員および特別協力法人】
九州 電力 株・大野 茂 (福岡) 新光 出 光・出野 豊 (福岡) 出光興産 福岡支店・山本繁弘 (福岡) 福岡 中央銀行・山本敬一郎 (福岡) 福岡 南川 整形外科 南川勝三 (福岡) 法人 南川 外科 病院 南川勝三 (福岡) 日本製粉 福岡工場・村上五一 (福岡) 福岡 県警 備業協会 村上五一 (福岡) 流通 共 済 株・花田積夫 (福岡) タイム 社 印刷 株・安部博満 (福岡) 博多ちくわ 株・魚嘉・松尾嘉助 (福岡) 権藤 税 理 事 務 所 権藤 成文 (福岡) 協 通 配 送 株・平野孝司 (福岡) 大 牟 田 運 送 株・山田 毅 (福岡) 株三島設計事務所 三島庄一 (福岡) 箱 崎 埠 頭 株・小田 一郎 (福岡) 日 西 物 流 株・原 重則 (福岡) 愛宕建設工業 株・野村 六郎 (福岡) 東洋特殊機工 株・西尾敏明 (福岡) 西尾トラスク運送 株・西尾秀明 (福岡) 南愛光ビルサービ 株・野田和禎 (福岡) 南クリールン 開 発 株・野田和禎 (福岡) 延 寿 産 業 株・池田邦夫 (福岡) 九州三菱ふそう 販 売 株・宮崎慶一 (福岡) 南安河内 商 店 株・安河内紀男 (福岡) 木原 税 理 事 務 所 木原敬吉 (飯塚)

会員ご氏名には、会費ご継続7年目をいただいたしたるしです。()は多年分のまとめお私いたみ、()は増口数()負担を示します。

※新規の御加入(先号以後、平成九年七月三十一日現在)は、右の地区ごとに記載いたしておりますので、何卒ご芳名をご確認ください。

友の会 年間3千円
(館の活動、館誌購読、催事企画に参加) 自然と文化の小天地創造

能古博物館の会

協賛会(個人) 年間1万円
“(法人) 年間3万円
[金援助を受ける]

館維持、資料収集、施設整備等の資

納入方法 郵便振替 017309160970
財団法人 能古博物館
右の会費受領は、その都度本誌に掲載、以後会費相当期間を名簿にします。

【図書出版】
『閨秀 亀井少栗伝』 詩、書
で仙厓の次に多いのが同時代の亀井少栗。しかも少栗には艶麗な漢詩の恋歌である。これが同女の作か否か。これに始まる探究の書である。

B5版・表紙布装美本
限定二、〇〇〇部
図録全カラー150頁・本文94頁
直売頒価二、五〇〇円(送料三八〇円)

『江河万里流る』 九大はもとよ
り東洋諸国の
大学教授はじめ、中国哲学専攻又は愛好同
士によつてさらなる孔子学の歴史と精神が
集約された寄稿三十一氏の論文集大成とし
て貴重な文献。また、平易に親しめる儒学
精通書。

B5版・本文28頁
限定二、〇〇〇部
直売頒価二、五〇〇円(送料三八〇円)

能古博物館だより

り、益軒が数年後、劇しい腹痛に苦しんだ時は、招かれて針療によって癒している。牛山と益軒は親密で、牛山が後世派を学びながら、実際の治療にあたってはむしろ古医法的であった。牛山の著書に天文・物理・哲学論を端的に述べた『螢雪余話』があり、これに益軒の影響が多分に語られている。

益軒の知人には両森両志・林田宗伴・鼎庵など長崎医のほか、長崎和蘭通事の榎林鎮山・西道庵蘭方外科医など広い。

益軒晩年の『用業日記』から自用調剤を見ると、滋養消化剤として益氣湯・補中益氣湯・帰脾湯・清痰湯・これに歯痛鎮静剤・秘結処方期されている。

正徳三年（八四歳）の秋から冬にかけて、かねて蒲柳の質とされる東軒夫人の病い重く、ついに十二月に六十二歳で亡くなった。夫人への用薬処方方は、益軒および藩医の鶴原正林が当たったが、消化滋養剤・下痢どめと痰咳どめで、これで夫人の病がおよそうかがえる。夫人の墓は益軒と並んで風雪に耐えている。

四十余年連れ添った愛妻を失い、心身の疲労と寂寞から、己もすぐれぬ健康を一層衰弱させ、翌年二月

まで来客をことわり家にとじこもった。

春には草書の文字を数枚書いて親戚と朋友に贈った。四月末には手足が麻痺して寢床にいたままで、再起は不能となった。駆けつけた親友・縁者に己の病状の進展を詳しく語り、終わりに『源氏物語』の宿木の巻

「心やすく暫しあらんと思ふ、世を思ひの外なるかな」

の句を暗誦したというから、己の最後が迫ったことを自覚していた。

夫人に後れる八カ月の死であった。益軒が晩年に到達した思想・学説による『慎思録』・『自娛集』、と『大疑録』、とくに『大疑録』は朱子学に対する疑問を体系的に述べたわが国最初の書とされる。

すでに早くから芽生えていた朱子学批判の態度について、学問には絶えざる思索による自得が必要である。とかく一般には經典をうのみにする習わしがあると指摘し、恨むらくは当世朱子学徒の見解が浅薄で、益軒自身が以前に発表した意見について、いわゆる虎に傷つけられる思いをしたことがあると語って友人に正論「朱子学の体系を是正しながら、そのある点に疑問を持つ」という稿本の発表を止めている。

「編集後記・付しておことわり」

本誌「貝原益軒」は、わが崇敬する元福岡大学教授の井上忠先生著で『吉川弘文館人物叢書（二〇三）貝原益軒・昭和三十八年発行』の抄出。同書はすでに広く好書とされている。今回本誌所掲は、すでに数年におよぶ亀井南冥・昭陽の続稿に「筑前の大学者貝原益軒先生小伝」として参考に供したものです。

当館は「亀井南冥・昭陽全集」八巻全九冊本（B五版・総頁五、二四二頁）をまる三年六ヶ月を要し、出版を実績しております。いま、文庫は亀井資料を中心として能古博物館施設を公開しながら、なお亀井父子の収集をつづけ、将来も、研究発表を行います。また、これに併せて、世界に誇り得るわが国の儒教教育の実績を資料として公表を期しております。このため九大・西南大・福岡大の諸先生に中哲講座としてご出講など願っておるものであります。こうした文庫と博物館の状況は、皆さんに気軽にご参加をいただける運営を心がけており、このため八月の夏休を除き毎土曜日には中哲講座を以て、皆様の生涯学習にお手伝いを致しております。

（おことわり）

本誌前号までの「昭陽著・烽山日記」と「少栗作・守舎日記」については、真に恐縮ですが本誌記事の都合により次号に飛んで続稿します。

また、当館賛助会員莊山雅敏氏の御祖父による手記「維新勤王事蹟」の続きは、本誌前二号掲載と合わせて総集別冊として既送会員各位にお送りいたします。これは郷土に限らず、広く歴史的に寄与する資料と考慮したことによるものです。

お互い人生を語れる教養と豊かな感性・これに中国哲学が最良

中国哲学講座（新学期開始）

講座科目＝論語・荘子・史記・漢詩
講師（右科目順に）
九大名誉教授 町田三郎
福岡大学教授 福田殖
大分大学助教授 森川登美江

講義日は右科目順に
毎月第1・2・3・4の各土曜日
午後一時半開始・三時まで
（八月は夏休み）

聴講料＝各講座年間一万一千円
（月額 一、〇〇〇円）
（各講座共・3カ年の実績と好評あり）
期間内に随時入講・また休退可
（毎回テキスト交付・電話申込も可）

・能古博物館ご案内・

開館 9:30～17:00（入館16:30まで）
休館日 毎週月曜
（月曜日が祝日の場合は次の日）
12月29日～1月3日
入館料 大人300円・中高生200円
交通 姪浜 能古行渡船場→フェリー(10分)
→能古(徒歩5分)→博物館
〒819 福岡市西区能古522-2
☎(092) 883-2881・2887
FAX(092) 883-2881